

青少年くらしき

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

4月



「明るい家庭づくり」作文

「明るい家庭づくり」作文は家族の役割、家庭のあり方など、日頃から家庭について考えていることをテーマにした作文です。令和元年度は、小・中学校から二七八四点の応募がありました。各学年一点、倉敷市長表彰の優秀賞、各学年二点、優良賞が選考されました。先月号に続き、優秀賞の中から二作品を紹介します。

おばあちゃんとわたし

万寿小学校 二年

柳野 心緒

わたしが年中の三月に、さいたまからおばあちゃんがわたしのうちへきました。おじいちゃん、わたしは生まれるずっと前にびょう気でなくなりましたので、おばあちゃん一人でおつかつしていました。そんなおばあちゃんがうちにきたのは、体のちようしがわるくなってしまうからです。

おばあちゃん一人にいるのがさびしくて、しんぱいなこと

がたくさんになってしまいうびょう気だといっていました。おじいちゃんに話を聞いてもらい、おくすりをのんで、すこしずつよくなってきました。今ではすっかり元気です。おばあちゃん、わたしやおねえちゃんとおしゃべりをして、いっしょにわらわらしたから、元気になったといっていました。でも、わたしはなにもしていかないのになあとおもいました。おくすりをあげたわけではないのに、なんで元気になったのか、はじめはわかりませんでした。今まで一人でいて

おしゃべりすることも、わらうこともすくなかったけど、今はわたしたちが学校であったことをはなしたり、いっしょにテレビを見てわらったり、わたしがあたり前のことだと思っていたことが、おばあちゃんのおくすりになっていたんだとおもいました。

そんなおばあちゃんから、教えてもらっていることがあります。おばあちゃんはおもいのしりで、ふるしき一まいで、カバンをついたり、ケガをした時にうでをつるしたりできます。ほかに、おさらあらいのコツを教えてくれたり、いっしょにおせちりようりもつくります。そんなだいすきなおばあちゃんに、これからもわたしのニコニコおくすりで元気になってもらつて、おばあちゃんからも、いろいろなことを教えてもらいたいのです。そして、いつまでも元気で長生きしてもらいたいのです。



晩ご飯は全員集合

北中学校 二年

栗原 健

僕の母はいつも元気で、朝から夜遅くまで働いています。僕の家族は、母と大学生の姉と僕の三人暮らしです。僕は中学生。学校で勉強や部活をして、家に帰ると宿題をしてから、テレビを見たり、ゲームをしたりして母の帰りを待つ。姉も大学でサークル活動をしたり、帰りに遊んだりしてから家に帰って母の帰りを待つ。ずっとそんな日常が続くのだと、僕はこの時はそう思っていました。

中学生になつてから、僕は成長期に入り、ず

「生き物ワールド (ふくろう)」 版画

倉敷市立第三福田小学校
4年 滝下 聖愛璃 (令和元年度)

版木をほる時、線をさけて丁寧にほり、目の光を表すのをがんばりました。時間がかかったけど、楽しく作ることができました。

いぶん食事の量が増えました。部活から家に帰るともうお腹はペコペコです。しかし、母は夜遅くに帰ってくるので、晩ご飯はとても遅い時間でした。僕はそれが我慢できなくて、

「お腹がすいて我慢できない。ご飯まだ？何も無いんだけど。」

と、たびたび電話越しに文句を言っていました。母は仕事をしているのだから仕方ないと頭では分かっていたのですが、僕はつい、いつも感謝の言葉ではなく、文句の言葉を発していました。その後、僕の家には常にカップラーメンなどの非常食が置かれるようになりました。それからというものの、僕は、ほとんど毎日カップラーメンを食べるようになりました。そんな僕を見て姉が、

「毎日カップラーメンは体に良くないよ。」

と言ったことがあります。でも僕は、ご飯を早く作ってくれない母が悪いのだと心の中で言い訳をしていました。

そんな食生活を送っていた頃、

冬休みに母が入院することになりました。入院中は祖母の家で生活することになりました。このとき、母の体調はとても心配でしたが、それ以外で不安に思うことはありませんでした。しかし、その冬休みの生活の中で、今までの考えや行動を改めなければと思う様々なきっかけがありました。

祖母の家での生活は想像以上にかなり大変でした。まず、自分たちの衣服は自分で洗濯し、干すのもたたむのも自分でしなければなりません。夜、寝る前の布団を敷くのも、部屋を片付けるのも、身の回りのことは全て自分でしなければなりません。僕にとっては何とでも大変で、正直面倒くさいと何度も思いました。最初はどうして自分がやらなければいけないのかと何度も思いました。でも、僕はふと気がきました。母は毎日仕事でどんなに忙しくても、どんなに疲れていても、この面倒くさいと思うことや食事の用意も全てしてくれていたのだと・・・。そ

れを当たり前だと思い文句は言っても感謝の気持ちを伝えていなかったことによく気が付いたのです。それは姉も同じだったようで、自然と二人で協力しながら、出来ることは行うようになりました。そして、祖母の家で生活する最後の日、姉が晩ご飯を作ってくれました。母がよく作ってくれるカレーライスです。母の作るそれとは少し味が違ったけれど、優しい味でした。

母が退院して帰ってきた日、姉と僕は、二人で母に謝りました。母がたった一人でどれだけ家のことをして支えてくれたのかを、離れて生活したことでやっと分かったのです。母は僕たちの変化に最初ビックリしていました。

「自分たちで気付いてくれて嬉しい。」と言ってくれました。これから変わろうとするのは良いことだとも言ってくれたような気がします。それから僕の生活は少しずつ変わっていききました。

まず、晩ご飯を作る担当は姉

になりました。姉は冬休みが終わってもできる限り毎日自分が作ると母に言っていました。カップラーメンやお菓子ばかり食べる僕の健康が心配だとも言ってくれて嬉しかったです。そして僕は洗濯や部屋の掃除など、自分で出来ることは面倒くさながら進んで行うように心掛けていきます。

姉の作る晩ご飯はいつも優しい味がします。そして日に日に母の味に似てきています。それが僕はちよっぴり嬉しいのです。

晩ご飯は姉と二人で先に食べることが多いです。でも、母が帰って来たら必ず僕が玄関のドアを開け、姉がリビングでご飯を用意して母を待ちます。このときは僕の家族が全員集合です。これは姉と僕との間で自然と決まったルールです。これからも母や姉に対してはもちろん、いろいろなことに感謝の気持ちを忘れず、良い意味で日常が変化していけばなあと思っています。

